

## エラスムスの「痴愚禮讃」に就て

——紹介と考察と——

島田 雄次郎

### I

エラスムスは久しく忘れられて居た。「ニラスムス・フォン・ロツテルダムは現代に於ては殆んど單なる名前以上のものではない」。然も、彼は「世紀の最も偉大にして、最も輝ける名譽」であつた。<sup>(1)</sup>然し、この彼の忘却は、決して不當にもなどとは云はれない。何故なら彼は整然たる體系の樹立者でもなければ、歴史の動きの中に於ける積極的な行動者でもなかつたからである。ところが、それにも拘はらず、彼に對する關心が最近にはかに高まつて來たのは何故であらうか。この事に關しては、一昨々年の一九三六年が丁度ニラスムスの四百年忌に當ると云ふ事も確かに一つのモメントとして作用して居るであらう。然し、それは唯それだけの事ではない。それは明かに一つの時代的關心のあらはれに他ならない。<sup>(2)</sup>そして、興味ある事には、我國に於ても最近それと同性質の關心の萌しが見られなくはないと云ふ事である。<sup>(3)</sup>この様な時に、私はたまたま以上の様な表題で、私が會つて本誌の小林教授還曆記念號に寄せた「中世獨逸大學とヒューマニズム」と題する小論で取扱つた問題、獨逸ヒューマニズムの史的意義の問題を、再び考へて見る事となつた。<sup>(4)</sup>従而、私はこの際、紹介と考察と、この二つの任務を本稿に課したいと思ふ。

エラスムスの痴愚禮讃に就て (島田雄次郎)

一八一〇

註

- (1) Zweig, S., *Triumph und Trübsal des Erasmus v. Rotterdam*, 1935, S. 9.
- (2) エラスムスの四百年忌に當り、彼の終焉の地ハーゼルの「歴史古學會」から出版された *Gedenkschrift zum 400. Todestage des Erasmus v. Rotterdam*, 1936 の序文に曰く「今日、エラスムスの四百年忌を迎へるに當り、地上のすべての文化國民は、——中略——彼を畏敬の念をもつて想起すべきあらゆる理由を持つて居る。そして特にわれわれ今日のジェネレーションは彼の本領とその行動とをつとめて活々と想起すべきである。彼等は今や、このあらゆる暴力的行爲を嫌惡した思慮ある中庸と平和的協調の代表者が、嵐の如き狂熱にかられて猪突せんとする同行者に常に指示したその道から、恐ろしくもすべり落ちんとしつゝあるが故に」。亦、同じ年、パリから出版された L. Gautier Vignal: *Erasmus* の序言にも次の如き言葉がある。「人はエラスムスの躊躇を、彼の臆病を云々する。然し、人は彼がその情熱の混亂の眞只中に、……全力をつくして對立の調和に努力した事を没する事は出来ない。これこそあの廣汎な衝突の喧騒の中にエラスムスの姿を高く浮き出させる所以である。——今、一九三六年、宛かも四百年前と同様に、國民的、或ひは宗教的狂熱によつて分裂せしめられた大陸の苦惱に満ちた光景を前にして、誰が一體エラスムスを否定出来るであらうか」云々と。詳しくは拙稿「エラスムス死後四百年前後」史學雜誌五十の一、海外史界欄参照。
- (3) 最近、雜誌「知性」誌上で渡邊一夫氏によつてフランソワ・ラブレのガルガンチュアの翻譯が連載され始めた事などを想起せよ。
- (4) 自ら「世界市民」たる事を求め、且つ、それを誇つたエラスムスは、實際にも、決して單なる獨乙のヒューマニストではなかつた。出生から云つても、それはオランダで、決して獨乙プロバノではない。然もそれにも拘はらず、彼を獨乙のヒューマニストと云ふ事は差支へがない。彼は獨乙に最も永く住み、獨乙に於て最も熱烈な歸依を待た。彼は當時、全歐のヒューマニズムの明星であつたとしても、特に亦、彼は獨乙ヒューマニズムの指導者であつた。vgl. Andreas, W.: *Deutsches Land vor der Reformation. Eine Zeilenwander* 1932 S. 508 (彼を通して獨乙ヒューマニズムを云々する事はその故に

是認される。

II

エラスムスは久しく忘れられて居た。彼の龐大な著述——それはライデン版の彼の全集(一七〇三年—一六六年)では大きなフォリオ版十冊に達する。然しそれすら文字通りの全集ではない——は、たとへそれが如何に同時代の人々を感激せしめたにせよ、現在では、唯、そこへの圖書館の奥深く、空しく積み重ねられて居るにすぎない状態であつた。<sup>(1)</sup> 然し、その中であつて、彼の著述の中では決して大きなものとは云へ得ない「痴愚禮讃 *Enchiridion Moriae*」だけは、不思議に讀まれ続けた。それは歐米各國に於て翻譯され、ラテン語の讀めぬ讀者にも親しまれて來た。<sup>(2)</sup> エラスムスが現在、殆んど單なる「名前」以上のものでなくなつて居たとしても、せめてそこに止まり得たのはこの「痴愚禮讃」のお蔭である。

「痴愚禮讃」はエラスムスの著作中、最もエラスムス的なものと云はれる。<sup>(3)</sup> それは、その標題からすぐに想像される様に、眞面目な學問上の勞作でもなければ、嚴肅な議論の開陳でもない。彼自身の表現によれば、それは一つの「即興的作品」にすぎない。<sup>(4)</sup> 散文の即興詩である。ところがこの單なる即興の産物であるそれは、それぞれ影響力の大きつた彼の著書の中でも、當時既に、一頭地を抜いて居た。生前、版を重ねる事、二十七、更にその各國語への翻譯すら行はれた程である。<sup>(5)</sup>

「痴愚」を取扱ひ、それに假託して物を云ふ事は、當時、一つの流行であつたかの觀がある。それは既にセバスチアン・ブランドの「愚者の船 *Narrenschiff*」に先づ見られ、ガイレル(J. Geiler von Kaysersberg)の痛烈な説教を通して人々に親しいものゝあつた。エラスムスがこの書を出して後聞もなく、ヒューマニズムの陣營から、辛辣な諷刺書

(20)

「愚人の手紙 [Epistolae obscenorum virorum]」が現はれて居る。エラスムスは、當時全く一般化して居たこの材料を巧みに掴み、それを巧妙に拔目なく處理し、それに、教養のあらゆる要求に合致し、時代の風潮にカツキリ適應する形式をあたへてこの「痴愚禮讃」をつくりあげた。<sup>(7)</sup>そこに展開される老練、流るゝ如きラテン語の美しさ、彼の世間的知識の博大さ。<sup>(8)</sup>それが當時の教養人の絶讃を博したのもことわりである。それは人間生活のあらゆる部面と行爲とに現はれる「痴愚」の華麗な畫廊である。<sup>(9)</sup>そこでは世の如何なる身分も、如何なる人々も、庶民も、騎士も、學者も、僧侶も、國も、法王すらも彼の鋭い觀察を免れて居ない。然し、彼の態度は飽迄「*Reverentem dicere verum*」微笑みつゝ眞理を語る<sup>(10)</sup>態度である。如何なる人々と雖も、之に對して怒る事は不可能であらう。エラスムス自身が云つて居る様に、「誰であらうとこの本に侮辱を感じ、苦情を云ふ者は、彼自身それに値する事を自ら認めて居るだけの事」とならう。<sup>(11)</sup>然し、ともあれ、人々はこゝでランケの次の言葉を注意しなければならない。「それは如何なる身分をもあまねく遍歴する。然しそれは、どの身分の處にも、僧侶の處に於て程長く、それ程熱心にとどまつた事はなかつた」<sup>(12)</sup>と。

ヒューマニズムは教會の弊風の攻撃によつて宗教改革の爲の精神的準備をしたと云はれて居る。この點に就てのエラスムスの功績を云々するものは、彼のギリシヤ語原典からの新約聖書の新ラテン譯、及び彼のキリスト教觀を盛つた「クリスチャン戰士教本 [Enchiridion militis christiani]」と共に、否、寧ろ眞先に、かの「痴愚禮讃」を擧げる。<sup>(13)</sup>そしてこの點に關して「痴愚禮讃」を重んずるものは、それを以て大膽不敵な諷刺書の列に列せしめる。<sup>(14)</sup>然し亦その宗教改革への影響を否定しない迄も、本書の本質を飽迄エラスムス自身の言葉に従つて「即興」的なものと見、大膽な諷刺書のかはりに、寧ろそこにエラスムス自身の人間記錄 Document Humaine を讀みとらうとする人々もある。<sup>(15)</sup>

かゝる見解の相違の存在は本書の性質が充分に複雑な事を示すものであらう。

(1) 最近、ライプツィヒ版全集(補遺)に *Ensat. Opuscula*. The Hague 1933 が出た。

(2) Gantier Vignal. *Erasmus*, p. 10

(3) Zweig, S., op. cit. S. 75. Andrews, W., op. cit. S. 512. 彼の著書の現代語に翻譯されたものは、この數年の「エラスムス復興」の波瀾にのみなれど、別として「痴愚禮讃」以外にも二・三はある。然し、その普及の程度に於ては到底、これに及ばない。

(4) Zweig, op. cit. S. 72f. Andrews, op. cit. S. 512.

(5) Taylor, H. O., *Thought & Expression in the 16. Century*, vol. I, p. 171. 更に Erasmus, *Das Lob der Torheit* (Reclam) S. 7 (Brief an Thomas Morus) を參照。以下「痴愚禮讃」の引用はすべてこのレクナム版の獨逸譯による。

(6) Kaue, J. v., *Männer und Zeiten der Weltgeschichte*. Bd I. S. 138.

(7) ebd. S. 157.

(8) *Gedenkschrift* S. 70, Zweig, op. cit. S. 73.

(9) Zweig, ebd.

(10) *Reclam* S. 6.

(11) *Lob der Torheit*. S. 10.

(12) Kaue, op. cit. S. 157.

(13) Zweig, op. cit. S. 301f.

(14) Schaller, H.: *Die Reformation*. 1924. S. 17. Zweig, op. cit. S. 72. 81.

(15) *Gedenkschrift* v. Des Erasmus «Lob der Torheit» und Thomas Morus «Thopio» 等の論文を讀んで居る August Rieger

エラスムスの痴愚禮讃に就て (島田雄次郎)

(21)

ニラスムスの痴愚禮讃に就て (島田雄次郎)

一八四

氏は、本書を以て單なる諷刺、單なるペンフレットと見る古き誤れる見解の、尙依然として見られる事を痛じて居る。最近の著書は Zweig の前掲書や Th. Quoniam, Erasme (Paris 1935) 等がその例として挙げられる。同氏によれば、唯 J. Huizinga, Erasmus (Haarlem 1925), deutsch: W. Kaege, Basel 1928 and 1936 が例外をなすとされる。

### III

「痴愚禮讃」のいはば序文をなすトーマス・モアへの献辭によれば、ニラスムスは本書への著想を、一五〇八年、彼の伊太利よりの歸途、アルプス山中に於て、旅の徒然の中から得た事が知られる。(1) 彼はそれを、イギリスに到着後モアの明るく落ついた別荘で一氣呵成に書きあげた。そして、それは間もなく、パリから出版された。(2)

先づ、道化した書き出しで幕が開く。それは、痴愚夫人 (Frau Stultitia) のアカデミックな自讃的頌詞<sup>シュレーマ</sup>である。彼女は云ふ。「人々がどんなに余を厄介視しようとも、妾は敢て云ふ、余こそ神々をも人々をも朗らかにする唯一無二のものではないかと。その證據に、余が此處に入つて來て以來、この集りの氣分がどんなに變つた事か。諸君の顔の何と生々として來たこと。またその愉快そうな拍手はどうであらう。云々(大意)」と。

自讃は「痴愚」の一つの屬性である。それは、冒頭、先づ人の意表に出で、然も、一つの單純ならざる味は、ひを感じしめる。「痴愚」を問題につゝ、それは既に、單なる毒舌の性格を脱して居る。此處に繰りひろげられる「痴愚禮讃」の複雑、微妙な味は、極めて限られた紙面に紹介する事は殆んど不可能である。然し、我々の任務からは、せめてその梗概なりと、こゝに呈示する事が必要であらう。即ち、前出の引用につづいて、――

かゝる扮装で現れたのは他でもない。満堂の諸君と少々、論議をせんとてである。然し、あのこせついた論議と思ふ勿れ。定義をしたり、分類したりする退屈な論議と思ふ勿れ。それは、余自身の頌詞である。世の賢者は自讃

を貶めもしよう。然し、自讃の代りに人をして自分を讃をさせる權勢家、似非賢者に比して、余のそれは罪のない事ではないか。

余は「痴愚」の女神である。人間と神々の父たるプルトスと、すべてのニムフのうち最も美はしきネオテスの親愛と愛撫から生れた、あのいまはしい結婚と云ふやつからではない。そして、パッカスとパンの娘達に守られて成長し、今では「自惚」「阿諛」「忘却」「怠惰」「肉慾」「無理性」等々の侍女にかしづかれて世界を支配する。余の神通力の廣大さ。

先づ、人に生命をあたへるは余である。「痴愚」なしに誰が結婚をし得ようか。そして、この「痴愚」のたはむれから學者も君主も僧正も法王も生れるのだ。人生の快適なるも余の賜である。それなくして、人生は人生の名に値しない。「無理性にこそ、人生の快はあれ」(ソフォクレス)。神は人生を楽しくする爲に、余をつかはしたのである。女は愚である。その女を男に配した神の攝理を見よ。

すべて輝かしいものは「痴愚」の賜である。戦争を見よ、戦場の手柄を見よ。「智慧」こそは實人生の邪魔物である。學者を見よ、その實務に於ける、娯樂に於ける無能を。政治の要諦も「痴愚」だ。愚かな大衆を掴む馬鹿々々しい手管こそ、政治には肝要なれ。哲人政治をとかくブランドの愚さよ。「痴愚」こそはあらゆる英雄的行爲の基礎であり、これこそ國家の基礎をおくものではないか。全人間生活は、その故に、喜劇である。然し喜劇は、よろしく、喜劇として受けいれよ。人間的立場を離れるこそ驚むべきであらう。

「痴愚」を輕蔑するは「人間」たることを輕蔑する事である。「痴愚」は自然であり、自然は不幸ではない。學問による人間の自己完成とや。人間はそれ程、不完全なものとして、神によつてつくられたか。學者の不幸を見よ。彼等

は自然なる事の幸福を知らない。「智慧」に身を捧げる事の愚かさ程、愚かなものが果してあらうか。

「痴愚」の一種に「狂氣」がある。狂氣は果して悲しむべきか。成程、突發的に、人に悲惨事を齎らす狂氣もあらう。然し、普通には、それこそすべての賜の最大なものとして求めらるべきである。狂氣こそは常人及び他人を楽しましめる。狩獵者、建築狂、學者、賭博者、迷信家。否、そればかりではない。これこそ、宗教の公けの教師の獎勵する處ではないか。聖者崇拜を見よ。全キリスト教界はかゝる迷信的愚行に満ち満ちて居る。

更に、自惚について想へ。自惚が人々を幸福にする事は説明するまでもなからう。各國家、各國民も自惚によつて得意である。それはすべての人間生活の「蜜」であり、「香料」である。眞實なりや、否やは問題ではない。幸福にすべて個人的見解に立脚するのだ。

人は不安と惱みの救主としてバツカスを讃える。然し、それは一時的であり、余の効果は永久である。然も、金もからず、後悔もない。それにしても、人々の余に對する忘恩の甚しさよ。彼等は余に犠牲を捧げず、寺院をも建てない。然し、それもよからう。何故なら、事實に於て、人々は常に余を心に抱き、その行爲を通して余を顯彰するが故である。それこそ眞の信仰ではないか。人々が夜、聖母に蠟燭を捧げ、晝はそれを忘れて居るのと比較せよ。實に、人間の愚行は、數へようとして數へ切れぬ。「智慧」の外見を持つものすら、それは「痴愚」の結果である。文法家の、詩人の「痴愚」を見よ。ギリシャ語の見當違ひの引用に得意な修辭家を見よ。お互に手紙や詩を捧げて仲間始めをする著述家達を見よ。役にも立たぬ議論に浮身をやつす法律家を見よ。表象の、全體觀念の、本質形態のとぬかす哲學者を見よ。そして更に神學者と云ふものが居る。

彼等神學者には觸れぬのが恐らく賢明であらう。彼等は何かと云ふと人を異端呼ばはりする。然も、彼等は一方

ならず余の御蔭を蒙つて居るのだ。彼等の自惚、そのわづらはしい論理、愚にもつかぬ問題、使徒をして今日にあらしめれば、彼等は恐らく茫然自失の他はないであらう。然し、ともあれ彼等は幸福ではないか。修道士とて同じ事。彼等の馬鹿々々しい規則づくめの生活、それは、その中に住む人々の個人的な差違などの存在を許さぬ筈であるのに、彼等の間には實に色んな人間が居る。更に彼等の自惚とその冗舌。然も、彼等の惡辣さはまた格別。懺悔を聞いて、それを他人に喋り散らす位は朝飯前だ。それよりも滑稽なのは彼等の説教ぶり、聲を高めたり低めたりまるで廣場の道化師の様に。然し、それを感じてきいて居る聴衆がある。彼等の勢力も、ひつきよう、「痴愚」の上に築かれて居る。

まことに、「愚」の力こそ偉大である。この助なくして、人は如何にして權勢家、或ひは君主たり得るか。彼等の責務は重大である。理性的な考慮をめぐらす時、人はその責務の重大さの前に挫けざるを得ないであらう。然るに現實の君主を見よ。彼等の如何に呑氣に、御目でたき事よ。

僧正や樞機員の地位とて同様である。その地位の困難さは君主のそれを遙かに凌駕して居る。然も、彼等は自ら權勢家や君主の生活をまねて、それを快適なものとする事が出来た。法王は如何。それとて同様である。彼はキリストの代表者、ペトルスの後繼者である。然るに彼等は、凡そ適しからざる事乍ら、土地を都市を貢税のみ追求し、その爲に戦をすら辭せない。之等、瀆神の法王よりも危険な教會の敵はあらうか。然も、彼等はその生活を敢て自ら怪まず、その榮華に酔ひしれて居る。「痴愚」の賜と云はずして何ぞや。獨逸の僧正達の戦、また戦の生活、これまたそれを他にしては考へ得られぬ。

然し、乞ふ、誤解する事勿れ。余の目的は諷刺にあらず、彼等に對する余の貢獻の頌詞である。結論をのべるな

らば、それはあらゆる幸福と成功とは、「痴愚」によつて始めて可能であると云ふ事である。幸福成功を望むものは「智慧」をさげよ。之こそ千古不磨の金言である。余は今や、それを權威ある引用によつて根據づけねばならぬ。

聖書を見よ。そこに於て「痴愚」に興へられた地位の如何に高き事よ。パウロは神の愚<sup>オコカ</sup>とさへ云つたではないか。愚かなるものこそ、神の恩寵を亨け得るであらう。パウロはまた云ふ、「我等はキリストの爲に愚かなるものなり」と。サロモは云ふ「我は人よりも愚なり」と。まるで「痴愚」に於て人に負ける事を好まぬかの様に。然し、それも尤である。キリストは使徒達を戒めて、「智慧」を恃む勿れとして、寧ろ無技巧の「愚」を訓へたではないか。そもそも「痴愚」とキリスト教とは不可分である。種々の儀式を最も喜ぶものは愚夫愚婦であり、信仰は狂氣に近い。「痴愚」こそ尊むべき哉である。

諸君よ、「痴愚」も時には、道理を云ふてふ諺を想起せよ。然し、諸君よ、すべてを記憶する聴手に禍あれ。すべてを忘れ、現實を謳歌し、さあ、杯を乾し給へ。――

以上、長々と「痴愚禮讃」の梗概をのべた。然し、それは原書の五、六十分の一にも足りぬ分量である。書かんと欲して書き得ざる事のみ多かつた。豊富な古典よりの引用――それは本書の持ち味にとつて、極めて重要なものであるにしても――の如き、すべて之を割愛した。唯、原書の各部分の分量的比例だけはどうか再現し得た積りである。それが原書について、いくらかでも具體的な觀念をあたへ得れば幸である。

註 (1) トーマス・モアへの誓簡は、通例本書と共に印行され、また翻譯されて居る。ニラスマスが本書の着想を得た年を一五〇八年としたのは、レタラム版の前掲譯書に據つたものである。Zweifelの著書、またAdenkschulte中のPittsの論文によれば、それは一五〇九年となつて居る。

(2) 出版の年代についても譯書、及び舊版のマイキー百科辭典によれば一五〇九年であるがTaylorの前掲書に於ては、それが一五一一年となつて居る。

#### IV

先づ、問題になるのは、本書に展開されて居る「痴愚」の觀念が極めて複雑、多義であると云ふ事である。それは先づ、生活を快適ならしむるもの、生活の原動力、人間的自然そのものであり、それはまた、文字通りの「痴愚」であり更にまた中世的形式主義であり、その頹廢であり、悪行であり、一轉してそれはまた、淨福なる信仰的生命そのものである。それは實に、Schilleudとでも形容するより他はない。<sup>(1)</sup> 然も、それらの多種多様の問題が、いささかの澁滞も、いささかの不自然さもなく、一人の話手の口を通じてなだらかに全篇に展開する。その技巧のたくみさにはそれを讀む何人と雖も驚嘆せざるを得ないであらう。

「痴愚」の概念のかくもSchilleudであり、融通無碍であること、それが本書についての意見の前述の如く岐れる所以であらう。成程、ランケの云ふ如く、具體的に個々の身分、階級をとりあげての論評に際しては、僧侶に對するまた神學者に對するそれが最も大きな分量を占めて居ると云ふ事は云ひ得る。然し、「痴愚」の人生そのものに於ける意義を論ずるそれは、僧職に對するそれよりも長い。其處で、ニラスマスは「痴愚」を快適な人生の源泉、生活そのものの原動力と見、人生を以て一つの喜劇と觀する。そして叙述は喜劇たるに適はしく、一讀、微笑を禁じ得ざらしめるものである。もし亦、これを巧みに朗唱するならば、滿座の喝采を博したことも、恐らく疑ひのない處であらう。<sup>(2)</sup>

元來、當時のヒューマニストの間では、そうした唯、單に人を樂しましめる爲の、或ひは聽衆の喝采を日當の作品をものする事が一つの流行であつたらしい。所謂Punchadenの如きがそれである。だから、本書をも一つ

のヒューマニスト的好尚の産物であり、エラスムス自ら云ふ様に、何と云ふ事のない「即興」的作品と見做すと云ふ事も決して理由のない事ではない。然し、そこに展開されるエラスムスの叙述は、その進行につれて、單なる笑ひ話でないものを、單なる「即興」として片づける事の出来ぬものを人々に感ぜしめずにはおかない。それは先づ、エラスムスのいはば「自嘲的」な態度と云はれるものである。<sup>(3)</sup>

人生に於けるすべて明朗、快活なるもの、美はしいものゝ源泉としての「痴愚」は、本書に於ては明かに、「知識」「智慧」、換言すれば、「書物の蠢たる事」と對照せしめられて居る。<sup>(4)</sup> エラスムスは當代、隨一の學者であつた。その生涯は、その蒲柳の體質に鞭うつての絶えざる知識への精進であつた。書物のある處、そこが彼の故郷であり、書物に親しむこと、それが彼の生活であり、書物をものすること、それが彼の仕事であつた。その彼の著述の中に、たまに、かゝるものがあつたと云ふ事は、たとへそれが單なる「即興」の産物であつたにしても、決して輕々に看過し得る事ではない。

當時、彼の名聲は漸く搖ぎなきものとなつたと云へ、既に四十の坂を越した彼は、書籍裡に失はれたその青春に果して一抹の悲哀を感じなかつたであらうか。更にまた、自己自身の生活の意識的な行爲者として、その批判的な觀察者として宿命づけられた學者・エラスムスが、その生活の緊張の間から、精神の天真さ、素朴さとしての「痴愚」の幸福を想つたとしては誤りであらうか。その意味に於ける「痴愚」こそは、また、行動の原動力であり、實人生の基礎である。内省と知識とは人をして行動の一手手前に踏みとどまらしめる。エラスムス自身がそうであつた。その意味に於て彼は正に實人生の落伍者でなければならぬ。従而、實人生をすべて「痴愚」の演ずる喜劇と見做す全篇の構想は、内省的な書齋學者であつた彼が、自ら實人生の落伍者と認めた事を示すものではなからうか。それは一つの自嘲

である。そして、この自嘲的な洞察は、最後に、神の救済を素朴な心の持主、知識によつて損はれざる者に限るに至つて頂點に達すると考へる事が出来よう。そして、かく觀ぜられるが故にこそ人は、本書中に含まれる諷刺的部分を無視しないにしても、『痴愚禮讃』の主題と主内容とは決して諷刺的ではない「全體的に考察する時、それは諷刺であるよりは、寧ろ一つの沈痛な《人間記録》である」と云ふ事が出来るのである。<sup>(5)</sup> そしてまた人は本書の中に、エラスムス自身も屬するヒューマニストの間に於ける虚飾、虚榮に就て痛烈な言葉の發せられるのを聞く時、<sup>(6)</sup> 更にまた當時漸く一般的となつたエラスムス崇拜に對して嘲弄的言辭の弄せられるのを聞く時、<sup>(7)</sup> 彼の凡を愚かならざる、内省的の纖鋭さとそこから生れる自嘲の微笑とを痛々しく感ぜざるを得ないであらう。前にのべた「痴愚禮讃」につ

つての二つの見解の二つは、その故に、決して單純に拒否する事は出来ない。

註 (1) *Getonschrift* S. 71. (Kiegers)

(2) *Zweige*, op. cit. S. 74 「英國につくべき否や、彼はあの小さな諷刺書を書きあげた。もともとそれは唯、集つた人々に對して、*Erleutening* を贈る爲めに書かれたが、云々」*Kiegers* は「『痴愚禮讃』を『大膽な諷刺書』と見る事を非難された *Zweige* も、だから、その成立の即興的な事を否認しはしない。亦、本書をもつてエラスムスの自嘲に裏づけられた人間記録と見る事を斥けなく (S. 80f.)。同様に、*Kiegers* と雖も、本書の諷刺的性格を拒否するものではない。要は、何れに重點をおくかが問題である。第二節末尾及び註(15)参照。

(3) *Getonschrift* S. 71. (Kiegers)

(4) 前掲梗概参照、また次の様に云はれる。「ヒタゴラハはその何にでもなり得る神通力にも拘はらず、哲學者にも、人間にも國王にもならず敢て雄鶏となつたのは何故であるか。彼はその變通によつて、人間が最も不幸なる者である事を知つたが故である。何故なら他のものはすべて自然に従つて生きて居るのに、人間だけが彼の運命の眼界を敢てのり越え様とする

エラスムスの痴愚禮讃に就て (島田雄次郎)

ニラスムスの痴愚禮讃に就て (島田雄次郎)

一九二

からである。然し、彼は人間の中でも、單純な市民を、學究の徒や國家の權勢家よりはより高く評價した。智慧の研究に身を捧げるものは、その故に、最も幸福から離れて居る。彼等は、單なる人間として、そのつましやかな地位を、それ程全く、思つて居ると云ふ事は何たる大馬鹿であらうか、云々(大意)」と。(S. 62f.)

(5) Gedenschrift S. VII. (Hügel)

(6) 前掲梗概、詩人、修辭家、著述家等の條を見よ。

(7) 迷信に關してのべた條に、「人は、また、定めの日に、定められた臘製の供物を捧げ、定められた信心の言葉をもつて聖者としてのエラスムスに呼びかけ、それでもつて、金持にならうと期待する云々」(S. 7)また、幸福はすべて「痴愚」の力によるとの事に關し、古典よりの數々の引用をした後に、「格言はこれ位で澤山であらう。さもないとエラスムスの受賣りの非難をあびせられるだらうから。云々」(S. 135)因みに、ギリシャ・ローマの古典からの數千の金言・警句をあつめ、それに註解を施したエラスムスの著書 *Adagia* が、當時、廣く行はれて居た。

## V

然し、それにも拘はらず、私は敢て本書を諷刺書の中に列せしめる見方に賛意を表したい。それも唯、單に本書の中にはまた諷刺的な性格をも認め得ると云ふ意味に於てではなしに、寧ろ積極的に本書の成立を以てエラスムス自身の諷刺的な意向に歸したいと思ふのである。

その理由の第一は本書が「痴愚」の辨であること云ふ事である。當時、セバステアン・ブランツト以來、獨逸に於ては、前述の如く對象として「痴愚」を問題とする事は親しみ深いものとなつて居た。そして、それは云ふ迄もなく諷刺的な意味に於てである。それが即興であると否とに論なく、エラスムスがこの「痴愚」を取上げた事は注意すべきある。彼が當時のこの一般的傾向から敢て逸脱したと考へる事が自然であらうか。それとも、彼をも亦、この風潮の中に組

れて考へる事が自然であらうか。それは云はずして明かであらう。理由の第二は本書の着想をエラスムスがその伊太利旅行よりの歸途に於て得たと云ふ事である。伊太利旅行こそは當時の獨逸の識者をして一様にローマ教會に對する反感と、それに對する改革者の情熱を湧きたしめたものであつた。フツテンがそうであつた。ルーテルがそうであつた。エラスムスもまたそこで教會の墮落を目のあたり見た。部下の軍人にとりまかれ、傭兵隊長と何等異なるところなき法王ユリウス。使徒の清貧どころか、豪奢と逸樂に身を持ちくずす僧正達。會つては「クリスチャン戰士教本」を出して、形式に墮し迷信に陥つた當時の基督教界に一石を投じ、後にはギリシャ原典からの新約聖書の新ラテン譯を出版して教界の是正に志した彼が、この状態に對して果して無關心であり得たであらうか。正に一言なかるべからずとする彼の氣持が、この「痴愚禮讃」にその捌け口を見出したと考へるほど自然な事はないであらう。理由の第三は彼の社會的關心の強さである。彼には書齋生活の理想しかなかったと云ふのは誤りである。彼は決して單なる「書物の蟲」ではなかつた。彼がヨーロッパの「平和」の爲に、皇帝 Karl V に對し、その兄弟の Ferdinand に對し、佛蘭西の Franz I. 英國の Heinrich VIII に對し、また更に「二人のサクセンの諸侯 Kurfürst Friedrich, Herzog Georg 等々に對してなした殆んど執拗とも云ふべき努力はそれを證明する。」として、かく考へるならば、彼が本書に一つの積極的な社會的意味——諷刺による働きかけ——を、最初から期待したと見るのが、また最も自然な事とならう。

以上あげた三つの理由は、然し、いはば外的な、間接的な理由である。然も、それは結局に於て想像の域を出て居ない。然し、人はこゝで再び、前にあげたあのランケの言葉を想起すべきである。即ち「それは如何なる身分をもあまねく遍歴する。然し、それは、どの身分の處にも、僧侶の處に於て程長く、それ程熱心にとどまつた事はなかつた」と。



そして、この言葉を脳裡にとどめつゝ、更にまた、あのトーマス・モアへの献辭に返つて見よう。そこでエラスムスは本書の成立の即興的な動機を述べた後、本書をモアに捧げ、起るべき非難者の攻撃に對しその加護を求めて居るが、その際彼はかゝる非難に對する用意として、かゝる試みがホーマー以來幾多の古典作家によつてなされて居ること、學者と雖も諧謔の許されて然るべきこと、本書の對象が一般的で特定の人々を指すものでないこと等を説いて居る。この場合に於てもエラスムスの筆は極めて流暢、自在であつて、何處迄が諧謔であり、何處が本心であるかのけじめが巧みにばかされて居る。然し、之等のすべては、彼が既に本書の社會的影響について一つの期待を持つて居た事を示すものであらう。殊に、その中に次の様な言葉が見られる時、彼の意圖は益々明かではなからうか。曰く、

「眞面目な重大な問題について洒落のめすことより厭ふべき事がないとするならば、亦一方に於ては、冗談から眞面目な側面をひき出すより喜ばしき事はないであらう。余のこの *Spottschrift* についての評價はすべて江湖にまつ。唯自惚にして余を欺く事がないならば余は信する、余は一愚者としてこの痴愚禮讃をものにしたのではなかつたと。」

かくて、「痴愚禮讃」はエラスムスの強い社會的關心から生れ出た「諷刺書」である。かく考へる時、あの淨福な信仰の生活を「痴愚」に歸し、神の救済を愚者に限るとする部分も、救はれざる者としての彼の「告白」ではなく、寧ろ、小細工に墮した當時の宗教界への痛烈な諷刺であるとされよう(第四節参照)。また、前半の人間的自然としての「痴愚」の叙述は、諷刺をして眞に「諷刺」たらしめる爲の巧妙なイントロダクションと見られるわけである。そして、かく考へるならば、あれ程まで *Schillend* であつた「痴愚」を縫つて一線を通る事も不可能ではあるまい。彼の「人間記録」的部分も、その間に巧みに挿入されたツマの如きものとされよう。モアへの献辭の中に、また、次の如き言葉がある「何人をも個人的に攻撃する事なく、全人類を非難するものは、果して眞に辛辣であり得ようか。寧ろ、教へ、且つ

警告する者と見えないであらうか。實際、如何に屢々余は余自らを嘲つて居る事か」と。

註 (1) *Zweig op. cit.* S. 74

(2) *Gedenkschrift* S. 144 ff. (*Kleinliche thun - Die politische Hofung des Erasmus und ihr Zusammenbruch*)

(3) *Loth der Thorheit* S. 10.

(4) *ibid.*

## VI

「痴愚禮讃」は恐ろしく複雑な書物である。それが諷刺書であり、明かに諷刺的意圖のもとに書かれた事に疑はないにしても、以上の様な説明だけでは何か割きれぬものがそこに残つて居る。それがまた、人をして本書の「人間記録」の一面を特に重視させる様になるのであらう。本書の諷刺書としての性格が問題とされなければならない。

本書の「諷刺」を動かしてゆくものは何か。換言すれば、著者の立場は何か。私は曾つて、彼と同じくヒューマニストであり、彼とは違つた意味で當時の歴史に際立つた姿を現はして居るウルリッヒ・フォン・フツテンの立場を、その諷刺的作品を通じて考へて見た事があつた。フツテンの場合、その立場は明かに獨逸のローマからの解放を願ふ熱烈な愛國者のそれであり、没落してゆく騎士階級の代辯者としてのそれであつた。それは極めて明瞭であり、彼のヒューマニスト的教養はかゝる立場を覆ふ薄いヴェールにすぎなかつた。(1) エラスムスには、然し、かゝる意味の明確な立場を求める事は出来ない。彼の生地ネーデルランドは當時最も國際的な地方であつた。そこには國家的なものが最も缺如して居た。そして、この地方出の學者もまた、一般にそうした特徴をもつて居る。(2) エラスムスにもそうした地方色が現はれたのであらうか。何れにしても彼は骨の髄からのコスモポリタンであつた。彼にとつては國民的

自負心の如きは、明かに、「痴愚」に属した。(3) そして、彼の出身はフツテンの様に騎士でもなければ、商人の出でも、農民の出でもない。彼の出生は極めて漠然として居る。傳へられる處によれば、年若い僧侶と俗人の娘との間の不義の子であつたと云ふ。然も、幼くして既に孤兒であつた。後兄人の手によつて、早くから修道院にやられたが、彼はその生活を嫌ひ、機會を求めてそゝを脱れ、名聲漸く騰るに及んでその舊縁を全く斷つた。従而、彼は僧侶でもない。彼は多くの宮廷からの招聘に應じなかつた。彼は各大學から提供された教授の椅子をさへ受けなかつた。要するに、彼は唯、ひたすらに「學者」であつた。新らしいヒューマニズムの學者であつた。彼の立場を求めるとすれば、此處に落著くより他はない。

「痴愚禮讃」は、私見によれば、明かに諷刺書として成立した。この點に關して、私は古き見解に左袒する。それは彼の伊太利旅行によつて刺戟された教會の弊風に對する非難の心から出發した。この本書の成立事情はヒューマニスト・ニラスムスの著書のそれとして誠に適はしい。何となれば、ヒューマニズムは、今更云ふ迄もなく、教會の權威に裏づけられたスコラ學の傳統からの解放運動であつたからである。それにしてもその諷刺のあの微妙さ、或ひはまた曖昧さはどうであらう。同じヒューマニスト達によつて書かれた「愚人の手紙」の誹謗に至るなき直載さに比べてそれはまた餘りにも複雑である。尤も、それは「愚人の手紙」の様に、「ロイヒリン事件」と云ふ様な一事件を契機とする、比較的限られた目的の爲のものではない。その點から、それが直載さに於て幾分弱められて居ると云ふ事は考へられる。その動機がどうであつたにせよ、その諷刺の對象は社會のあらゆる分野、人間行動のあらゆる方面にひろげられた。否、それは自己に對してすら適用された。それは、成程、檢閲の眼を逃れる爲の巧妙な策略であつたかも知れない。(4) 事實、彼はモーアへの獻辭の中で、一般的諷刺の無害を極力説いて居る事を見ても、(5) 彼の意識の中

にそうしたもののあつた事は推察される。然し、彼の諷刺が、遂に、かゝる貌をとつて展開された事は、また彼自身の本質に根ざす事ではあるまいか。

ニラスムス程、あらゆる社會的な宿命の絆から自由であつた人間も珍らしい。そして、彼はその「自由」を、また意識的にも守りつづけた。従而、直接的に彼の社會的立場を云々する事は不可能である。彼はその意味に於て最もとらはれざる人間の型に屬する。そして、この點から彼の諷刺が遂に一般的諷刺に擴大されたと考へる事は出来ないであらうか。彼にとつてはどの身分も、どの社會的集團も、「自由な」諷刺の對象となる事が出来たのである。自由で、そして聰明な彼にとつては他をそのまゝにしておいて、特に一つを諷刺する事は不可能であつたのであらう。本書が一般的諷刺の貌をとるに至つた事は以上の様にも説明される。

然し、彼は學者であつた。新しいヒューマニズムの學者であつた。そして、それ以外の何者でもなかつたとするならば、彼の頼り處は、「新しい知性」以外のものではない筈である。彼の「新しい知性」は古きものに反撥する。そこで彼は中世的スコラ的なものを遠慮なく槍玉にあげた。彼は先づ最初に彼の論法が、あのくどくどしい退屈極まるスコラの論法でないと斷つて居る。それは凡そ傳統的形式を離れ、自由自在に展開された。そして、その中で神學者の煩瑣が、修道僧の規則づくめの生活が忌憚なく嘲弄され、最後にそれが眞の信仰に如何に遠いかが諷刺される。否、彼の「新しい知性」は更に進んで中世的象徴が既にその象徴たるの意義は失つて居る事を看破する。「如何なる僧正であれその職務上の服裝を幾分なりと詳しく調べて見たら、即ち、凡そ汚れない行狀を意味する雪白のリネンの肩衣、新舊兩聖書の完全な知識を示す法冠、サクラメントの嚴肅なあらゆる俗世界の接觸から自由な行使を想はせる手袋をばめた手、——最後に、あらゆる人間的情念の克服を象徴する捧げられたる十字架などを考へて見たら、誰が果してそ

の地位に平氣で止まり得ようか、云々(大意)<sup>(1)</sup> 同じ事が樞機員にも、法王にも、更にまた國王、諸侯についても云はれる。彼は中世的スコラのなるものゝ無意味を洞察したばかりではない。彼は更にその墮落を洞察したのである。象徴的な傳統的形式の背後に、彼は個々のものゝ實狀を看破する。Individualな物の見方である。普遍的形式に遂に Individualなるものにその座席を譲らなければならない。「修道僧の馬鹿くしい規則づくめの生活、かゝる千篇一律さは思慮や體質の多様さと一致し得ない事は明かであらう。實際、どうしてどうして、色んな連中が彼等の中には居るんだから、不思議だと云ふより他はない、云々(大意)」<sup>(2)</sup> Individualな物の見方は「自然」の尊重に通ずる。そこから人間の自然は高く評價されなければならない。それは人間を幸福ならしめるものであり、またそこにこそ人間の救はあるのである。然し、悲しい哉、彼は「學者」であつた。他の何物にもとらはれざる彼も、彼自身の「知性」にはとらはれざるを得なかつた。「知性」の尺度を以て測りきれないものは、之を「痴愚」とするより他はない。人間生活の諸相は、彼自身の生活の實際もまた、「知性」のみを以てしては割りきれない。「痴愚」は實人生のあらゆる處にある。そして、その實人生は「知性」を信條とする彼の敢て近づき難いところである。彼はその實人生を望んで、然も、書齋に老いなければならなかつた。エラスムスの「悲劇」はかくて生れる。そして、この道程こそ本來諷刺書たりし彼の「痴愚禮讃」をして、亦彼の人間記録たらしめた道程であらう。前述の二説の調和はそこにこそ求められないであらうか。「痴愚禮讃」がエラスムスの著述中、最もエラスムス的であると云はれる事も以上によつて理解されよう。

註 (1) 拙稿「ウルリッヒ・フォン・フツテンの立場」歴史學研究第二卷第五號

(2) Taylor, E. O. op. cit. vol. I, p. 152 f, p. 155.

(3) 「自然は、個々の人間の階級に對してのみならず、また全國民國家にもその調整的日憶を植ゑつけた」と云つて、彼はその

後に、各國の國民たちの馬鹿々々しい自惚の例を擧げる。(p. 51 f.)

(4) Zweig, op. cit. S. 76.

(5) Jobb dor Torheit S. 10.

(6) op. cit. S. 127.

(7) op. cit. S. 111 f.

## VII

「痴愚禮讃」は最もエラスムス的な著作である。そして、エラスムスは當時のヒューマニズムの明星であつた。特に獨逸のヒューマニズムの運動は彼を中心として展開して居る。斯ふ考へるならば、「痴愚禮讃」を通して得られたわれわれのエラスムス觀を、そのまゝ獨逸ヒューマニズムに當はめて見ると云ふ事も是認されて然るべきであらう。即ちそれを以て獨逸ヒューマニズムのエッセンスと見做さうと云ふのである。

エラスムスの知性は中世的迷妄を看破するに充分な近代性と鋭さを持つて居た。然し、その知性は實生活と結びつかない知性である。従而、それは實生活には何等の具體的成果を齎らす事は出来ない。彼は古典の中に「新しい知性」の表現を見出したヒューマニストの一人である。彼は古典を、特にギリシャ古典を尊重した。然し、剛毅なる實踐的意欲と結びついたあのギリシャ的知性は彼の遂に與り知らぬ處であつた。それは批判をなし得ても、建設的ではあり得ない。よしんば、其處に建設的な何物かがあるとしても、それは單なる知性の、學術の一領域に止まるであらう。事實、彼が本書の中で建設的な暗示をあたへて居るものは、僧侶によつて行はれる聖書解釋の愚劣さ、索強附會に對してテキスト・クリティクを擧げて居る處だけにすぎない。<sup>(3)</sup> 壯大なスコラ學の體系も彼の目には三文の價

値もなかった。然し、彼がそれに代つて提供し得たものは唯これだけである。眞に新しきものゝ建設が不可能であるとするれば、古きものゝ全面的否定もまた不可能であらう。それはたかだか「新しき知性」による修正に終るの他はない。エラスムスは此處に止まらざるを得なかつた。彼が一方に於て教會の弊風を攻撃しつつ、然も宗教改革運動に參加せず、飽まで中世的教會の統一を主張したのはその爲であらう。それを單に、彼の平和主義からのみ説明するのは皮相である。エラスムスが彼の「新しい知性」を盛つたその著述を通じて、時代人の目を覺まさしめる事に寄與した事は疑がない。その點に於て彼の歴史的意義は重大である。然し、その覺醒した知性を以つて新時代を切り開いたものは「痴愚」に驅られた人々であつた。そして、このエラスムスの歴史的意義は、そのまゝ、獨逸ヒューマニズムの歴史的意義であらう。ヒューマニズムと獨逸大學の交渉の事實から私が會つて歸納した結論もまたそうであつた。聰明なエラスムスは、然し、それを意識して居た。彼は彼の著書の中で次の様な感懷を洩して居る由である。即ち、彼自身は旅人に行手を示して、自らは決して其處に行く事のない道しるべ、自らは物を切る力を持たずに鐵を銳利ならしめる砥石の如きものであると。<sup>(2)</sup>「痴愚禮讃」のあゝアイロニカルな調べも宜なる哉と想はざるを得ない。<sup>(4)</sup>

註 (1) 「ブチマー」ギリシヤ大才の諸相(和辻氏譯)第一章「何を我々はギリシヤに負るか」參照。

(2) *Job der Torheit*, S. 149f

(3) *Gelehrtenschrift*, S. 203, (Schlörer, ; Erasmus im Spiegel von Thomas Münters Reformationspolitik.)

(4) 本稿を草し終るに當つて、フイナングの名義「エラスムス」第二節註(15)參照を遂に參照し得なかつた事を遺憾とする。